

薛仁貴物語の展開にみる明代元雜劇改編の一側面

遇, 禱揚
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7405116>

出版情報 : 中国文学論集. 54, pp.15-30, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



薛仁貴物語の展開にみる明代元雜劇改編の一側面

遇 禕 揚

はじめに

薛仁貴は、絳州龍門の人、唐初に活躍した異民族の反乱を鎮めた名将である。その事績は『旧唐書』と『新唐書』に記載されている。

時九姓衆十餘萬、令驍騎數十來挑戰。仁貴發三矢、輒殺三人。於是虜氣懾、皆降。(中略)軍中歌曰、將軍三箭定天山、壯士長歌入漢關。九姓遂衰。(時に鉄勒の九姓の軍勢十余万が、精銳の騎兵数十騎をやって来て戦いを挑ませた。仁貴は三本の矢を放ち、たちまち三人を殺した。これによって敵兵は戦意を失い、皆降伏した。……軍中では次のように歌われた。「將軍は三本の矢をもって天山を平定し、凱歌を歌いながら漢關に入る」と。九姓はこうして衰微した。)

元代以来、この「三箭定天山」の逸話をもとに、多くの戯曲作品が創作された。そのうち、現存する北曲雜劇は以下の四作である。

〔薛仁貴衣錦還郷〕(元刊雜劇三十種)に所収、以下「元刊本」と略称)

〔薛仁貴榮歸故里〕(元曲選)に所収、以下「元曲選」本と略称)

〔摩利支飛刀對箭〕(脈望館鈔本『古今雜劇』に所収、以下「飛刀對箭」と略称)

〔賢達婦龍門隱秀〕(脈望館鈔本『古今雜劇』に所収、以下「龍門隱秀」と略称)

薛仁貴物語の展開にみる明代元雜劇改編の一側面

現時点で確認できる最も早い作品は「元刊本」である。「元刊本」は、現存する数少ない元代の雜劇テキストの一つであり、当時の教坊司の管勾を務めていた張国賓の作品である。本作を収録する『元刊雜劇三十種』について、小松謙氏は元の最末期の元統年間以降で刊行された可能性が高いと推測し、下層知識人の需要に応じて刊行されたものであると指摘した。さらに同氏は、それ以前には戯曲の脚本を刊行する前例がなかったため、書坊は役者が使用する台本をそのままの形で刊行し、販売したとする^③。

明代中後期になると、元雜劇選集が多く出版されるようになったが、これを代表するのが『元曲選』である。『元曲選』は、臧懋循が明万曆四十三（一六一五）年から翌四十四年にかけて、前後二回にわたって校訂・刊行した元雜劇選集である。その出版は営利を目的として、高級知識人を主たる読者と想定して出版されたものであるとされている。彼らの好みに迎合する必要があったと考えられる。従って、『元曲選』本は、明代文人たちが元雜劇、または薛仁貴物語をどのように受容していたかを十分に反映した作品と言えよう。

また、ほぼ同時期に趙琦美によって刊行された脈望館鈔本『古今雜劇』には、「飛刀對箭」と「龍門隱秀」の二劇が収録されている。「飛刀對箭」劇には、「萬曆四十三年乙卯三月十六日校録内本清常記」との題識があり、宮廷上演用の内府本からの抄録であることが明らかである。「龍門隱秀」劇には、抄録する底本が明記されていないが、作品の末には役者の扮装を記す「穿關」があることから、同じく内府本に基づいて抄録されたものであると考えられる。

このように、薛仁貴物語は、元雜劇の本来の姿に近い元刊本と、明代文人による校訂や改編を経た改編本両方を備えている。ゆえに、薛仁貴像及び主題の変化を比較することによって、明代における元雜劇改編の一端を明らかにすることができるであろう。

薛仁貴物語に関して、これまでにもその成立過程や諸作品間の関係を論じた研究が多く見られる^④。しかし、管見の限り、薛仁貴像そのものに焦点を当てた検討は十分とは言えない。そこで、本稿では、前述の四つの雜劇を中心に、元刊本と明改編本における薛仁貴像の変化を検討し、作品の趣向及び主題の変化を考察する。

一、四作品の概要

まず、各作品の概要とあらすじを簡単に説明しておく。

(一)「元刊本」

正末が演じるキャラクタ―は折ごとに変わる。楔子と第二折、第四折では薛大伯(薛仁貴の父)、第一折では杜如晦、第三折では拔禾(薛仁貴の旧友)を演じている。薛仁貴を中心にまとめれば以下の通りである。

楔子 農作業を好まず武芸に熱中する薛仁貴は、両親の反対を押し切って従軍する。

第一折 論功行賞の場面。張士貴は薛仁貴の功を奪おうとする。皇帝は二人に弓の腕比べをさせる。張士貴は嘘を見破り追放され、薛仁貴は官職を封ぜられる。

第二折 薛仁貴の夢。夢の中で薛仁貴は帰郷し、困窮した両親と再会するが、張士貴に許可せず勝手に歸郷する罪を問われ、連行される。

第三折 薛仁貴は皇帝に帰郷を許され、帰郷の途上、かつての友人に叱られ、両親が貧乏な生活を送っていると叱責混じりに告げられる。

第四折 薛仁貴が両親と再会する場面。駙馬となった薛仁貴は父を大いに喜ばせる。人々とともに父を輿に乗せる。

(二)『元曲選』本

『元曲選』本のあらすじと脚色の配置は、おおむね「元刊本」の形を保ちながらも、第一折と第四折には大幅な改編が施されている。その主な理由は、明代になると皇帝を舞台上に登場させることが禁じられていたためである。そのため、「駕」の脚色や皇帝が登場する場面が削除されたり、あるいは徐茂功に置き換えられたりする。「元刊本」と異同の大きい第一折と第四折のあらすじを示す。

楔子 同「元刊本」

第一折 論功行賞の場面。徐茂功は二人に弓の腕比べをさせる。張士貴は嘘を見破り追放され、薛仁貴は官職

薛仁貴物語の展開にみる明代元雜劇改編の一側面

を封ぜられる。薛仁貴は下賜された酒を飲んで帰省する夢を見る。

第二折 同「元刊本」

第三折 同「元刊本」

第四折 両親と再会する場面。薛仁貴は徐茂功の娘を娶り、両親と本妻である柳氏に拝す。徐茂功は勅命を受けて龍門鎮に赴き、薛仁貴の両親と妻に封賞を授け、薛仁貴一家は謝恩する。

(三)「飛刀對箭」

現存する脈望館鈔本の題目は「薛仁貴跨海征東」、正名は「摩利支飛刀對箭」である。一方、『録鬼簿續編』の題目はこれに異なる。従つて、現在確認できる「飛刀對箭」は、元代の作品をもとに、明代の宮廷を経て改編されたものと考えられる。正末が演じるキャラクターは、頭折と第二折、楔子、第四折では薛仁貴を演じ、第三折では摩利支葛蘇文軍の斥候である「探子」を演じる。

頭折 薛仁貴は両親の反対を押し切つて従軍しようとする。

第二折 薛仁貴は張士貴のもとへ行くが、張士貴にいじめられ、徐懋功に助けられる。

楔子 摩利支葛蘇文との戦いの場面。張士貴は戦わずして逃げたのに対し、薛仁貴は三本の矢で葛蘇文の飛刀を打ち落とし、勝利を収める。

第三折 探子が摩利支の敗北の様子を報告する場面。高麗は敗北を認め、再び唐王朝に従う。

第四折 張士貴は薛仁貴の功を奪おうとするが、徐懋功に見破られ追放される。薛仁貴は官職を封ぜられ、両親と妻が京師に迎えられて封賞される。

(四)「龍門隱秀」

脈望館鈔本のみが現存しており、作者不詳。題目は「英雄土虎榜標名」、正名は「賢達婦龍門隱秀」。『也是園書目』と『曲録』にのみ記載があるため、千田大介氏は明代の作品と推定する。「龍門隱秀」は、『新唐書』に記された薛仁貴の妻柳氏の「勸夫出征」の話に基づいて展開する日本である。正旦は薛仁貴の妻である柳迎春を演じる。

楔子 柳員外の娘である柳迎春は、草むらに白虎が寝ているのが見えた。よく見ると、寒さに震えながら眠つ

ている柳家の作男薛仁貴だと気づき、不憫に思い、自分の打掛を彼にかける。

第一折 柳員外は娘と薛仁貴とのことを知って、家名を汚すことを恐れ、娘を薛仁貴に嫁がせ、家から追出す。

第二折 薛仁貴は従軍しようとするが、両親を心配して躊躇する。柳迎春は自分が両親の世話をすると約束し、薛仁貴に従軍しよう促し、白袍を贈る。

第三折 薛仁貴は張士貴に、蓋蘇文との戦いで先鋒を務めさせられる。柳迎春は薛家で日夜働き、貧乏な生活を送る。父から米を借りるが、兄夫婦にいじめられ、米を奪われてしまう。

第四折 張士貴は薛仁貴の功を奪おうとするが、徐茂公に見破られ追放される。薛仁貴は平遼公に封ぜられ、李元帥の娘を娶り帰郷する。柳迎春は賢婦人として封賞される。

二、「元刊本」と『元曲選』本の比較

二一 薛仁貴像の変化

次に、「元刊本」と『元曲選』本における薛仁貴像を具体的に比較する。これら二つの作品では、いずれも薛仁貴は正末として演じられておらず、また「元刊本」では贅白が少ないため、薛仁貴のイメージを直接的に描く部分は限られている。そのため、薛仁貴像は他の登場人物のセリフや曲を通じて間接的に窺うしかない。

「元刊本」の楔子では、父の薛大伯は以下のように薛仁貴を紹介している。

這孩兒從小不好莊農作業、子好掄槍使棒、學的十八般武藝皆全。(この子は幼い頃から農業を好まず、ひたすら槍や棍棒を振り回すことを好み、十八般の武芸をすべて習得した。)

すなわち、薛仁貴は正業に就いていない武芸の優れた武人として描かれている。また、第一折の皇帝が二人に弓の腕比べをさせる場面も、薛仁貴の優れた弓術と自信に満ちた姿が描かれている。

【醉扶歸】薛仁貴箭發無偏曲。手段不尋俗。張士貴拽硬射近却不放。薛仁貴那箭把金錢眼裏吉丁的牢關住。張士貴拽滿了弦鳴箭出。那箭離垛子有三十步。〔醉扶歸〕薛仁貴の放った矢は全部的中し、その腕前は並外れている。張士貴は力任せに弓を引き、的を射ようとするが、技量はさほど優れていない。薛仁貴の矢は金錢の穴にしっかりと命中した。一方の張士貴は弦を引き絞って矢を放つが、矢は的から三十歩も外れてしまった。）

一方、『元曲選』本では、「元刊本」より多くの寶白が追加され、薛仁貴は多面的に描き出されている。楔子では薛仁貴の從軍の動機が明確に語られている。

父親在上、孩兒聞的古称大孝須是立身揚名、榮耀父母。若但是晨昏奉養、問安視膳、乃人子末節、不足爲孝。今當國家用人之際、要得掃除夷虜、肅靖邊疆。憑着您孩兒學成武芸、智勇雙全、若在兩陣之間、怕不馬到成功。但博得一官半職、回來改換家門、也與父母添些光彩。不然只守着這茅簷草舍、做個莊家、豈不枉了一身本事。（父上、私の聞くところによりますと、古来、大孝とは立身出世して名を揚げ、両親に榮譽をもたらすことだと言われています。ただ朝夕に食事を用意し、安否を尋ねるだけならば、それは人の子として最低限の節義に過ぎず、孝とは言えません。今は國家が人材を必要とする時であり、夷狄による攻撃を掃討し、辺境を平定しなければなりません。私は優れた武芸と知謀を兼ね備えておりますゆえ、戰場に立てば、たちまち成功を収めることができるでしょう。さすれば、官職を得て帰郷し、家門を改め、父上母上にも光彩を添えることができます。さもなれば、この茅葺きの家に閉じこもり、農夫として過ごすだけで、この身に備わった才能を無駄にしてしまうことになります。）

『元曲選』本における薛仁貴の從軍動機は、國家の辺難を解決するためであると同時に、自身の才能を發揮する機会を掴もうとするものでもあったことが明白である。個人的な出世欲を「大孝」や「忠君愛國」という大義名分に包含しており、儒教的価値観に適う「士大夫の英雄」像が窺える。

また、第一折の【寄生草】では、韓信の典故を用いて、古来より將相は寒門から出ると主張して、薛仁貴の寒門出身という特徴が強調されている。

【寄生草】想當日韓元帥、乞食那漂母。若不是蕭何舉薦元戎做、則那漢王怎把重瞳蹙。顯見的忠良多在寒門出。

則你這築沙堤推倒了紫金梁。怎如他溫麻坑扶立的擎天柱。【寄生草】韓信元帥が、川で綿を打つ老母に食を乞うたことを考えてごらん。蕭何が推薦しなければ、漢王劉邦はどうして彼を重用しただらうか。忠良な者は多く寒門から出るものだ。ただあなたは砂の堤防を築いて紫金の梁を倒すようなことをしているが、どうして彼のような麻を漬ける穴から立ち上がった大黒柱に及ぶことができようか。

ここでは、貧困から身を起こした韓信を引き合いに出すことで、寒門の士が才能によって立身出世する理想が語られている。科挙制度によって社会的上昇を志す明代の知識人にとって、このような韓信像は自己の願望を重ね合わせる対象であり、薛仁貴の形象はまさにその理想を体現するものであったと考えられる。また、この典故の引用は、単に個人的な出世欲の表現にとどまらず、明君が出自に関わらず有能な人物を登用すべきであるという政治的願望をも暗示している。薛仁貴がこのような形で描かれているのは、すなわち、当時の知識人層の価値観と理想を反映するものであるといえよう。

『元曲選』本の第三折の【堯民歌】では、幼い頃の友人の視点から衣錦還郷した薛仁貴が描かれている。彼はもはや単なる農民ではなく、朝廷に仕える立場にある。かつての仲間であった村人を怖がらせ、威風堂々白袍をまとった名将として登場する。

【堯民歌】呀、莫不是半空中降下雪神祇。(薛仁貴云)兀那莊家、你住者。(正末唱)他叫一聲雄吼若春雷。(薛仁貴云)你休慌、我要問你句話哩。(正末唱)諛的我心兒膽兒急獐狗猪的自昏迷。手兒脚兒滴羞篤速的似呆癡。禁也波持。身軀怎動移。我可便不待酒伴妝醉。【堯民歌】ああ、まるで空から雪の神が降りてきたかのようだ。(薛仁貴が云う)「おい、その農夫よ、待ちなさい。」(正末が歌う)彼の叫び声は春の雷のように轟く。(薛仁貴が云う)慌てるな、私はお前に一言聞きたいのだ。(正末が歌う)私は心臓が飛び出そうになり、胆が冷えるほど驚き、意識が遠のく。手足は震え、呆然とする。どうしても体が動かない。ここは酔い潰れたふりでやり過(う)そう。)

『元刊本』と『元曲選』本の比較から、薛仁貴像が元代から明代にかけて変化したことが確認できた。『元曲選』

本の薛仁貴は、単なる武芸の優れた武人に、出身の卑しさと出世後の威厳に満ちている側面を加え、明代文人の価値観と儒教のイデオロギーに適う忠孝両全の理想的な名将へと再構築されていることがわかる。

二一二 主題の差異

「元刊本」と『元曲選』本に描かれている薛仁貴像の差異は、両作品がそれぞれ異なる主題に基づいて構築されていることに由来すると考えられる。以下では、題目と正名の相違に注目し、それを手がかりとして両作品の主題を検討する。

「元刊本」の題目は「白袍將朝中隱福、黒心賊雪上加霜」、正名は「唐太宗招賢納士、薛仁貴衣錦還郷」である。「白袍將」は薛仁貴を指し、「黒心賊」は張士貴を指すことは言うまでもない。問題となるのは「隱福」という部分の解釈である。高橋文治氏は、後半の「黒心賊雪上加霜」に対応すると考え、「隱福」は「隱伏」とすべきで、薛仁貴が張士貴に功績を隠され、朝中に埋没する状態を指すと解釈している。しかし、両作品では戦争の場面や埋没を描く内容が大きく展開されておらず、張士貴に功績を奪われる描写も第一折のみにとどまっている。したがって、「隱福」は単に「隱伏」を意味するのではなく、より広い意味を持つと考えられ、別の解釈も可能であろう。

実際に、「元刊本」の第三折には、両親の生活の苦しさを間接的に表す曲や、薛仁貴が一人で富貴を享受することを非難する曲が多く含まれている。例えば次の【四煞】である。

【四煞】與人家擔好水、換惡水。又不曾南頭販賤、北頭販貴。您享着玉堂裏臣宰千鐘祿、却覷著那草舍内爺娘三不歸。灑了些恁惶惱。子辨的煩煩惱惱、切切悲悲。【四煞】人々のために良い水を担ぎ、悪い水を交換する。南で安く買い、北で高く売ろうとするような商売もできない。あなたは玉堂で大臣として千鐘の祿を享受しているが、草ぶきの家にいる両親を顧みず、家に帰らない。両親は悲しみの涙を流している。ただ煩わしく、切ない思いに駆られる。

この曲からは、薛仁貴の栄華と両親の貧苦との強い対照が示されていることがわかる。また、悪玉の「黒心賊」張士貴は、薛仁貴の功績を奪おうとするだけでなく、薛仁貴の夢の中で帰省する途中で加害する場面が見られ、薛

仁貴の「孝」の実現を阻む「雪上加霜」のような存在としても描かれている。これらを踏まえると、「隱福」と「加霜」は、いずれも薛仁貴と父母の再会という文脈において理解すべき語であると考えられる。「隱福」とは、帰郷する前に、薛仁貴が父母や故郷の友人たちに知られずに密に富貴を享受していたことを指し、「加霜」とは、夢の中でようやく一家団圓を果たそうとした瞬間、張士貴に邪魔され、夢から覚めてしまうことを指していると思われる。すなわち、「元刊本」は個人の栄達の陰にある両親の犠牲をより庶民的な目線から強調し、親子の再会を通して「孝」を主題的に打ち出しているといえる。

これに対し、『元曲選』本の題目は「徐茂公轅門比射」、正名は「薛仁貴榮歸故里」である。この題目が示すように、『元曲選』本における徐茂公の出演が増えている。前述のように、明代には皇帝を舞台に登場させることが禁じられているため、『元曲選』本では、徐茂公が皇帝の代理としての役割を担っている。例えば、彼のセリフには「奉聖人の命（聖人の命を奉ずる）」という表現が頻繁に見られる。また、プロットの上でも重要な役割を果たしている。薛仁貴が「軍師與仁貴做主咱」と懇願するような、薛仁貴の弱さを見せる場面が何度もある。例えば、第一折にある腕比べの場面は、徐茂公らとの会話を通じて、薛仁貴がやや臆病であるかのように描かれている。

一總過海平遼、有五十四件大功、都被張士貴頼了。今日不是軍師問呵、仁貴也不敢説。軍師與仁貴做主咱。（海を渡つて遼を平定した際、五十四もの大功を立てたが、すべて張士貴に横取りされてしまった。今日、軍師のお尋ねなくば、口外するつもりはありませんでした。軍師よ、どうかお助けください。）

腕比べの場面で張士貴の陰謀を打ち破るのみならず、徐茂公は娘を薛仁貴に嫁がせて帰省を許し、封賞を与えるなど、薛仁貴を助ける存在として描かれている。このように、薛仁貴の英雄の一面を意図的に弱めることによって、皇帝の代理者としての徐茂公が前面に押し出されていることが読み取れる。

また、第四折では、薛仁貴の父から息子の従軍を積極的に評価する曲が見られる。ここにも国への「忠」が個人としての「孝」よりも優先される価値観が示されている。

【喜江南】呀、怎知道今日呵得遇這榮華。則俺個蒼顏皓首一莊家。也會緋袍象簡帶烏紗。孩兒你可也喜咱。不枉了從前教你學兵法。【喜江南】ああ、どうして今日こんな榮華に巡り合えると思っただろうか。この年老いた

農夫の私でも、緋色の袍を着て象牙の笏を持ち、烏紗帽をかぶることができるとは。我が子よ、お前も喜んで
いるだろう。昔お前に兵法を学ばせた甲斐があつたというものだ。）

【沽美酒】元來個大唐朝也名將乏。俺孩兒肯奮發。只他這一片忠心報國家。和遼兵做場廝殺。才得那干戈罷。
【沽美酒】もともと大唐朝も名將が不足していたのだ。我が子は奮起してくれた。忠心を尽くして国に報い、遼
兵と戦い、ついに戦乱を終わらせたのだ。）

さらに、『元曲選』本では、「元刊本」に見られる両親が息子を思う感情を表す曲や、生活の苦しさを表す曲、あ
るいは両親を顧みずに一人で榮華を享受する薛仁貴を責める曲などがほとんど削除された。これによって、薛仁貴
の親不孝と親の犠牲といった要素が弱まり、国に尽くして功績を立てるとする「忠」の主題が前面に押し出されて
いることが窺える。

以上の考察から、明代における薛仁貴物語は、個人的な出世や親孝行よりも、国家への「忠」を強調する方向へ
と再編されていることが明らかである。では、同じ明代の脈望館鈔本に収録された「飛刀對箭」と「龍門隱秀」は
『元曲選』本と同じ傾向を持っているのであろうか。次は、この二作を取り上げ、明代改編における思想的な変化を
さらに検討したい。

三、「飛刀對箭」に見る不整合

「飛刀對箭」における薛仁貴像は、作品の中でいくつかの矛盾点が見られる。とりわけ、従軍動機及び性格描写に
おいて、作品全体の一貫性を欠いている点が目される。

まず、従軍動機に関しては、頭折の【油葫蘆】において、運悪く不遇をかこつ心情や、個人的な立身出世への志
向を表す表現が多く見られる。

【油葫蘆】空著我每夜思量計萬條。閑遙遙的何日了。看別人臥重衾食列鼎喜任消。一會家我運不行似喫著迷魂
藥。一會家我志不成似喫著無心草。聖人道。貧不憂富不驕。我這裡怨天公安排得我無著落。困蟄龍久隱在草

團瓢。(油葫蘆) 毎夜、私は無駄に万の計略を思案する。あぶれ者の日々はいつ終わるのだろうか。他人が厚い布団に寝そべり、豪華な食事を楽しむのを見て、私はただ羨むばかりだ。時には運が悪く、まるで迷魂薬を飲まされたかのように、時には志を成し遂げられず、無心草を食べたかのようにだ。聖人は「貧しくても憂えず、富んでも驕らず」と言うが、私のほうは居場所がないと感じ、天の差配を恨んでいる。まるで草むらに隠れた龍のようである。)

そして、頭折と第二折では三度にわたり「薛仁貴也、幾時是你那發達の時節也呵(薛仁貴よ、いつになったらお前の出世の時が来るのだろうか)」と感嘆する場面がある。また、父親から従軍を反対された際には、彼は「休將你這歹孩兒留戀著、枉把我這功名來耽誤了(悪ガキの俺を引き留めるな、俺の功名を無駄に遅らせるな)」と言い返した曲や、張士貴に従軍動機を問われ、「特地來奪富貴争名目(わざわざ富貴を奪い、名声を争うために来たのだ)」と答えた曲など、個人的な立身出世を目的とする従軍動機が示されている。第四折の最後の曲にも、庶民的な立身出世観が表れている。

【掛玉鉤】(中略) 拂綽了土滿身、梳掠起白髭鬢。這的是一日爲官、索強似千載爲民。(掛玉鉤) ……体の泥を掃い、白いひげを梳かす。これは一日でも官職に就くことが、千年も平民でいるよりましだということだ。)

なお、物語の大枠では薛仁貴の個人的な立身出世を志す姿が主題として描かれているものの、頭折では「愆孩兒盡忠不能盡孝也(あなたの子は忠を尽くすために孝を尽くせません)」といったセリフや、【尾声】においては「捨著我這一腔鮮血立唐朝(この身を捧げて、唐朝を立てる)」といった曲詞があり、個人的な出世と対立する、「忠」を尽くすことが強調されていると思われる。頭折のみならず、第二折と第三折の末にも、宮廷演劇用の痕跡と思われる、皇帝をたたえる祝詞が見られる。例えば次の第二折の【尾声】である。

【尾声】願吾皇懾夷狄、降邊國、千千年九五飛龍齊天福。願吾皇永坐著宗廟舊、家邦老、萬萬載百二山河壯帝居。(尾声) どうか我が皇帝には、夷狄を鎮め、辺境の国々を帰順させ、千年もの間、天と並ぶほどの福德をお授けくださいませ。どうか我が皇帝には、永遠に宗廟の御位におつきになり、国家を安泰に治め、永遠に天

下を統べ、帝居を壮麗にお守りくださいませ。)

次に、薛仁貴の性格面における不整合についても見てみたい。頭折の薛仁貴は、かなり頑陋で野性的な性格を示し、父と喧嘩する場面がある。

【那吒令】(中略)我似不的那閔子般賢、我學不的曾參般孝。和你一個瞽瞍把我閑瞧。【那吒令】……私は閔子騫のように賢くないし、曾參のように孝行を学ぶこともできない。あなたのような盲目の老人さえ私を下に見る。)

しかし、このような親不孝で功名心の強い薛仁貴が、作品の終盤では、両親の世話をする者がいないことを理由に官職を辞退しようとする、「忠孝雙全」の人物として称賛されている。

(正末云) 大人、薛仁貴家中有一雙父母、年紀高大、無人侍養。因此上不敢受這官職。(徐懋功云) 此人忠孝雙全。(正末が云う) 大人、私、薛仁貴には年老いた両親がおりますが世話する者がおりません。ですから、この官職を恐れながら受けることができません。(徐懋功が云う) この人は忠孝を兼ね備えた人物だ。)

また、この作品の薛仁貴は、武人でありながらも、知識人的な一面も付与されている。

【正宮端正好】(中略) 則這書中自有他這黃金屋。將我便久困在紅塵路。【正宮端正好】……書の中には黄金の家があるというが、私は長い間この紅塵の道に閉じ込められている。)

【滾繡毬】毎日家聽鐘聲山寺裡齋。趕宿頭古廟裡居。有那等財主每聽笙簧。則在那畫堂深處。如今那有學的酪子裡韁置藏諸。【滾繡毬】毎日鐘の音を聞き山寺で齋食をとり、古廟に住む。裕福な連中は画堂の奥深くで笙や簧の音を楽しむ。今や学識のある私は、玉の箱にしまつて隠されているようだ。)

ここでは、薛仁貴が寺に滞在し、菜食をとりながら出世の時を待つ姿が描かれており、「呂蒙正風雪破窯記」の呂蒙正や「西廂記」の張生といった貧しい書生像を連想させる。このことから薛仁貴が単なる武人ではなく、四書五経を修め、科挙による出世を志す知識人として再構築されていると考えられる。

従軍動機と性格に見られる不一致から推測すると、現在確認できる「飛刀對箭」は、内府に収められる前に、性

格の異なる先行のバージョンが存在していた可能性がある。すなわち、従来の薛仁貴像は、個人的な出世欲が強く、武人としての野性味を備えた人物であったのに対し、現行の「飛刀對箭」では、宮廷での上演に適するよう、文武両道かつ忠孝双全な忠臣像へと再構築されていた。この作品は、完成された物語とは言えないまでも、薛仁貴像が「庶民の英雄」から「士大夫の英雄」へと変化していく中間的な作品として位置づけられると思われる。このような改編の傾向は『元曲選』本にも継承され、薛仁貴物語は、庶民的な娯楽作品から、文人など上層階級にも受容されうる教化的作品へと格上げされたといえよう。

四、「龍門隱秀」に見る教化的意図

「龍門隱秀」は忠と孝という儒教的理念を薛仁貴のみならず、妻である柳氏へも拡大し、教化的意図が一層明確な作品である。この作品は、主人公が柳氏に移るため、薛仁貴の描写は少なく、登場詩で貧しいながらも勤勉である人物として簡潔に描かれている。

毎日奔波只爲貧、且將勤力事耕耘。男兒若得風雷信、平步青霄建大勳。(毎日貧しさのために奔走し、ただ勤勉に耕すことに力を注ぐ。男児たるもの、もし風雷の知らせを得れば、やすやすと大きな功績を立てることができらる。)

柳氏の賢妻のイメージを際立たせるため、前述の三作品に比べ、第二折における薛仁貴の従軍への決意が弱まり、両親を心配して躊躇する様子を強調して描かれている。これに対して柳氏は、「国のために忠を尽くすべし」と説き、自らが舅姑の世話を引き受けることを明言し、薛仁貴を送り出す。

【石榴花】(中略) 你學成武藝言忠信。你不可懶惰其身。合當報國從先進。豈不聞將相出寒門。(石榴花)……あなたは武芸を学び、忠義と信義を重んじるお方、怠けてはなりません。国のために力を尽くすべきです。将相は寒門から出るといふ言ひ伝えを聞いたことはいないのですか。

【鬪鶴鶉】不要你兩意推辭。則要你一言定準。常言道百藝防身。你可便三思自忖。便休題父母年高活計貧。奈妻

兒恰二句。爲妻的治業成家。做男子的忠君報本。【鬪鶴鶉】二心を抱いて断ることはしないでください。ただ一言で決断すればいい。よく言われるように、百の技芸は身を守るものだ。あなたはよく考えてみるべきだ。父母が年を取り、生計が苦しいということは言うまでもない。妻たる私はちょうど二十歳。妻は家業を治め、男としての務めは、君に忠義を尽くし、国に報いることだ。

さらに、物語の構成においても、食うや食わずの生活を送る柳氏と、軍中でいじめられる薛仁貴とが、それぞれ主線と副線として展開されており、薛仁貴の忠義と柳氏の賢徳とを対照的に際立たせ、夫妻がともに「忠孝雙全」の理想像として描かれている。

なお、物語の要素についてみると、明らかに説唱詞話や他の戯曲作品の影響が認められる。まず、二人の結婚の経緯は、成化本説唱詞話『新刊全相唐薛仁貴跨海征遼故事』（以下「故事」と略称）に類似している。

數九天下大雪雪霜交冷。我見你無衣穿慈悲傷心。脱衣服與你穿重重囑咐。休交人識破了辱莫家門。不覺他一時間交人識破。有哥哥和嫂嫂打罵奴身。多虧了老母親將奴發送。到你家無奈何與你成親。（厳しい冬の寒さの中、大雪が降り、雪と霜が重なっていた。私は、あなたが着る物もなく、寒さに震えている姿を見て、慈悲の心に駆られた。自分の服を脱いであなたに着せ、何度も何度も一人に見破られないように、家の名誉を傷つけないように」と念を押した。しかし、ついに見破られてしまい、兄と嫂は私を殴って、罵った。年老いた母が私を助けたおかげで、あなたの家に送り届けてくれた。私は仕方なく、あなたと結婚することになった。）

「龍門隱秀」の楔子および第一折に見られる、自分の赤い打掛を脱いで薛仁貴に掛け、彼が将来必ず出世すると確信する場面は、この逸話をもとに付加されたものである。もともと、この「袍を贈る」モチーフや、運命を暗示する超自然的要素は、「故事」のみならず、同時期の南戯「白兔記」にも共通して見られる類型である。成化本「白兔記」第十二・十三出では、岳節度使の娘が風雪の中の劉知遠に父の袍を与えたことが縁となり、後に劉知遠を婿として迎える。「六十種曲」本ではこの袍が赤色に変えられており、「龍門隱秀」の設定にも影響を与えたと考えられる。

また、第三折では、柳氏が舅姑のために実家に米を借りに行くが、兄嫁に泥棒と誤解され、父に与えた米を取り返される場面が描かれている。このプロットも、「六十種曲」所収の南戯「琵琶記」第十七齣の「義倉賑濟」に類似

している。ただし「琵琶記」では、趙貞女が舅姑のために救済米を受け取りに行くが、悪徳の里正に奪われる展開となっている。

これらの借用や改変により、「龍門隱秀」には南戯「白兔記」「琵琶記」に見られる「賢妻孝子」の思想が継承されていると推測される。「白兔記」の冒頭には「國正天心順、官清民自安。妻賢夫禍少、子孝父心寬。(國が正しくすれば天の心にもかない、官が清廉であれば民は自ら安らぐ。妻が賢明であれば夫の災いは少なく、子が孝行をすれば父の心は寛ぐ)」、および「琵琶記」には「只看子孝共妻賢(ただ子の孝行と妻の賢明さのみを見よ)」の曲詞が見られる。「龍門隱秀」はこの二作の要素を巧みに取り入れ、柳氏を趙貞女の系譜に連なる理想的な賢妻として描かれていると考えられる。このように、「龍門隱秀」では柳氏の賢明さと薛仁貴の忠孝と結びつけられ、「賢妻孝子」という儒教的な教化の意図が表れている。

おわりに

以上の考察により、薛仁貴故事における人物像の変化は、時代背景および受容層の変化と関係していることが明らかとなった。すなわち、「元刊本」では、薛仁貴は貧しい農民から立身出世を果たす人物として描かれ、個人の出世と「孝」が重んじられる。これに対し、明代の『元曲選』本および「飛刀對箭」では、薛仁貴の「忠」や文武両道の一面が強調される。さらに「龍門隱秀」に至っては、薛仁貴の妻である柳氏が主役として描かれ、賢妻孝子という儒教的道徳が物語の主題として浮かび上がっている。

この改編の背景には、当初は民間の娯楽であった元代の雜劇が、庶民の好みに合わせて立身出世や親子の再会といった場面に焦点が当てられていくのに対し、明代に入ると、内府での上演に応じて官署や文人による改編が進み、作品の主題は次第に「孝」から「忠」へと変化していった。薛仁貴故事の改編は、明代における北曲雜劇の改編の思想的傾向の一端を映し出すものであり、庶民的英雄譚が宮廷的教化劇へと変化していく過程を示すものであると考えられる。

注

- (1) 『新唐書』(中華書局、一九七五年) 卷百十一「薛仁貴傳」、四一四〇頁。『新唐書』と『旧唐書』の両方に記載が見られるが、内容は大きな相違がないため、本稿では『新唐書』を引用する。
- (2) 本論文は、「元刊本」は寧希元・寧恢校點『元刊雜劇三十種新校』(鳳凰出版社、二〇二三年)を、「元曲選」本「薛仁貴」は『元曲選』(中華書局、一九五八年)を、「飛刀對箭」「龍門隱秀」は『脈望館鈔校本古今雜劇』(古本戲曲叢刊第四輯、商務印書館、一九五八年)所収の影印本を参照。
- (3) 小松謙『中國古典演劇研究』(汲古書院、二〇〇一年) I 第二章「元刊本考」、および赤松紀彦ほか編『元刊雜劇の研究』(汲古書院、二〇〇七年)の小松謙「解説」を参照。
- (4) 先行研究には、高橋文治「元刊本『薛仁貴衣錦還鄉』劇をめぐる」(『東方学』第七十六輯、一九八八年)、千田大介「薛仁貴故事變遷考」(『中国文学研究』第七期、一九九一年)、西川芳樹「元代に於ける立身出世を描く作品群について——『薛仁貴征遼事略』を中心に——」(『日本中国学会報』第六十六集、二〇一四年)などが挙げられる。
- (5) 前掲の西川氏の研究は薛仁貴像を論じるものの、その立身出世觀の表現に限っての考察にとどまる。
- (6) 浦漢明校注『新校録鬼簿正續編』(巴蜀書社、一九九六年)「諸公傳奇失載名氏、並附于此」に続く「飛刀對箭」項に、「薛仁貴三定天山、莫離支飛刀對箭」と記する。
- (7) 前掲注(1)、「將改葬其先、妻柳曰、夫有高世之材、要須遇時乃發。今天子自征遼東、求猛將、此難得之時、君盡圖功名以自顯。富貴還鄉、葬未晚。仁貴乃往見將軍張士貴應募。」
- (8) 「呂蒙正風雪破窯記」には、呂蒙正が出世前に白馬寺で僧侶に齋食を拒まれる挿話が見える(『脈望館鈔校本古今雜劇』(古本戲曲叢刊第四輯、商務印書館、一九五八年)所収影印本参照)。また、張生が科擧試験のために上京し、普救寺に寓する物語も広く知られる。張生と崔鶯鶯の物語は元稹『鶯鶯傳』に始まり諸本に展開するが、張生像に大きな差異はないため、ここでは詳述しない。
- (9) 『明成化說唱詞話叢刊・十六种附白兔記傳奇一種』(文物出版社、一九七九年)収録の影印本を参照。
- (10) 毛晉『六十種曲』(臺灣開明書店、一九七〇年)を参照。